

IVLP参加者、 バイデン米副大統領に会う！

1月9日～27日に、「米国のエネルギー政策」についてのプログラムに参加された井口雄一郎さん(共同通信社)、大濱克行さん(沖縄県庁)、伐栗恵子さん(産経新聞)、富浜靖雄さん(宮古島市役所)の4名が、フィラデルフィアにあるGirard Collegeで行われた、1月16日の**マーティン・ルーサー・キング牧師の誕生日**を記念するイベントに参加し、バイデン米副大統領と対面しました。



左から大濱さん、富浜さん、バイデン米副大統領、通訳
→イベントの様子は[コチラ](#)(Video)



アラムナイ限定サイトのお知らせです

米国政府主催の交流プログラム参加者限定のサイトをご紹介します。

未登録の方はぜひご登録を
alumni.state.gov

アラムナイ同士の交流が図れるだけでなく、イベント情報、求人情報、ニュース、写真、補助金・奨学金などの情報も満載

フルブライターら3名が、 モンゴルでの 同窓会会議に参加

2011年10月8日～10日、モンゴルのウランバートルにて、在モンゴル米国大使館の主催により、East Asia and Pacific Regional Alumni Association Enrichment Conference(東アジアおよび太平洋地域の国務省人物交流プログラム同窓会会議)が行われました。タイ、シンガポール、中国、韓国等、全12カ国、総勢59名が集まりました。



左から頼はるかさん(SUSI)、橋本千英さん(イースト・ウェストセンター(EWC))、今井章子さん(フルブライト)

会議では、主に、1. 東アジアおよび太平洋地域の同窓会発展のベストプラクティス、2. 若手の同窓会組織への参加促進、3. 地域内の同窓会活動の連携、の三点について話し合われました。日本からは、今井章子さん(東京フルブライト同窓会代表)、橋本千英さん(イースト・ウェストセンター東京同窓会代表)、頼はるかさん(Study of the U.S. Institute on U.S. Foreign Policy for East Asian Student Leaders Program(SUSI)代表)の3名が参加しました。

会議最終日は、地域間の同窓会連携を実現するためのプロジェクト・コンペティションを実施。頼さんが所属したチームが見事勝利し、日本、韓国、ミャンマー、ベトナム、シンガポール、ロシア、カンボジア、タイの若手同窓生が、各々の国で課題に取り組むことに決めました。プロジェクト実施基金として2,000米ドルが提供されることとなり、アジア各国の同窓生へのアウトリーチに一役買うプロジェクトとして期待されています。
[→次ページに続く](#)



米国大使館
広報・文化交流部
教育人物交流室
Education and Exchanges Office
Public Affairs Section
EMBASSY OF THE UNITED STATES
JAPAN

Inside this issue:

アラムナイ・ニュース	1-6
アラムナイによる 東日本大震災支援活動	5
広報・文化交流担当公使 退任の挨拶	6
アラムナイによる体験記	7-11
各種アナウンスメント	12
国務省運営の アラムナイ限定サイト	13

モンゴル同窓会会議出席者レポート①

フルブライター2004 今井 章子 さん (東京財団・広報渉外ディレクター)

この会議で私は、急速に民主化・発展する自国の将来を担うフルブライターたちが、誕生まもない同窓会組織をいかに盛りたてていくか、試行錯誤する姿を間近にみる事ができた。

同時に、今年60周年を迎える日本のフルブライト・プログラムの同窓会組織である「東京フルブライトアソシエーション」が、他国に比べ、財政面でも活動内容でも、ガバナンスにおいても、いかに圧倒的な存在であるかを相対的に知ることができたことも、私にとって大きな学びであった。

そこで自分の「日本のファンドレイズ戦略」の発表では若い同窓会を意識して、日本社会とともに発展してきた募金の歴史を説明することとした。以下が概要である。

すべては恩返しから始まった

日本のフルブライト・プログラムのファンドレイズは80年代にさかのぼる。日米貿易摩擦などもあり留学生が厳しい環境に置かれていた当時、1982

年に迎える30周年記念事業を検討することになり、すでに日本の各界で影響力を持ち始めた同窓生有志の発案で、第二次世界大戦後の困難な時代に自分たち日本人留学生に資金提供してくれた米国への「恩返し」の気持ちから、来日する米国人フルブライターのための寄付金を募ろうということになった。これがきっかけとなって「ガリオア・フルブライト同窓会」が結成されたのである。つまり、「恩返し」の意志が先にあって、それから同窓会が誕生したのだ。



ファンドレイズについてプレゼンを披露



シンガポールのフルブライターらと、同窓生組織の効果的な運営を議論(筆者右)

その後、順調な日本の経済成長とともに募金活動も発展していき、86年には「フルブライト記念財団」が設立され、毎年6~8千万円をフルブライト・プログラムに提供している。募金を「財団」という枠組みで保全・発展させている例はきわめて珍しいはずだ。さらに低成長期に入った今の日本が直面する課題は、会員数の減少とそれに伴う財政的課題であり、今後は先輩同窓生たちによる社会的・財政的な遺産を、若い同窓生たちがどのように継承し、それを少ない人数で新しい時代にあつた形で発展させていかカギとなろう。



チンギスハーン広場にて。EWC同窓生・橋本さんと(筆者左)

グローバル・アラムナイの強化

会議に参加して得たもう一つの学びは、国務省による同窓生限定のState Alumni ウェブサイト(<https://alumni.state.gov/landing-page>)を通じたグローバル・アラムナイ構想である。世界中のアラムナイがいつでもどこからでも情報をやりとりできるツールが出現したことは、これまでの同窓会活動にも大きな変化をもたらすだろう。今回の会議でも若いアラムナイたちはさっそく、

ネットを通して共同プロジェクトを実施することにしていた。こうした若きリーダーたちの無邪気な試みに対し、私たち日本の



ゲルを訪ね、遊牧民の女性とともに

同窓会も積極的に若年層を取り込んで、ともに活動のフロンティアを広げていくことも重要だと思った。

最後に、初めてのモンゴルで新しい仲間を見出す機会を与えてくださった国務省および米国大使館に心から御礼を申し上げたい。

モンゴル同窓会会議出席者レポート②

イースト・ウェストセンター(EWC)・APLP 2006 橋本 千英さん (グッチグループジャパン・Legal Manager)

初めて地、モンゴルへ

在モンゴル米国大使館および「モンゴルState Alumni Association」の主催で、ウランバートルで開催される“East Asia and Pacific Regional Alumni Association Enrichment Conference”に出席しないかという話を、アメリカ大使館広報・文化交流部より打診されたのが、2011年8月の終わりだった。

まだ一度も行った事のないモンゴルで、しかもプレゼンテーションをする機会を与えてもらえるなんて、どれほど幸運な事だろうと、心が震える思いであった。



在モンゴル米大使とアジア各国の同窓生とともに(筆者、中央の大使の右隣)

プレゼンのテーマとして、「Youth leadership and volunteerism and their role in community development」というテーマを頂いた時に、アジア各国から参加する様々な分野のプロフェッショナルの前で、一体何を話したら良いのかとても悩んだ。リーダーシップ論については、どこかで読んだ書物の受け売りのような事は話したくなかった。

また、日本人としてプレゼンをする機会を頂いたからには、2011年3月11日の東日本大震災について、どうしても話したいと思った。自分がアメリカ留学を通して学んだ事・震災を経験して考えた事を掘り下げていくことは、自分自身に問いかける良い機会となった。

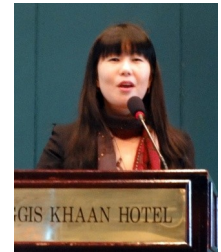
留学と東日本大震災から見えたもの

プレゼンでは以下のようなことを話した。

1. ハワイのEast-West Center (EWC) というシンクタンクのAsia Pacific Leadership Program (APLP) に参加し、21カ国から集まった44人のクラスメイトと共に、座学、ワークショップ、フィールドトリップを続ける中で、これまでの自分の人生では想像もできなかった彼らの体験を学んだ事。

2. 「多様性」を具現した環境の中で、偏見を捨て他の文化をレスペクトする姿勢を学んだ事が、最大の収穫であった事。

3. ニューヨーク州司法試験に向けて勉強を続ける過程で実感したこと、即ち、苦手とする分野は一番伸びる可能性を秘めている・自分の強みと弱みを把握する事が大切だ・難しい判断を迫られる局面においては、自分が正しいと思っている事は周囲に惑わされず信念を持ってやり通すべきだ。



若者のリーダーシップについてプレゼンを披露

4 震災後に、被災者支援の寄付をEWC Alumni東京チャプター(EWCA)会員に呼びかけた事。以上に加えて、特に大震災に関しては、会議参加者らの国々からの支援に対し深い感謝の念を述べつつ、日本の復興を見守り、実際に日本を訪れてほしいと強く訴えた。

EWCAの役員として会議に参加させて頂き、参加者にEWC・APLPについて興味を持って頂けた事を嬉しく思った。

思わぬ再会！

東ティモール代表は、何とMaster進学前の語学プログラムから共に学んだEWCの友人だった。ハワイで出会った東ティモールの友人とモンゴルの会議でバツリ会うなんて、世界は狭く、私達は出会った7年前より、ずっと大きく成長したのだと痛感した。



韓国、モンゴル、タイ等の同窓生とともに(筆者左から2人目)

これからもアメリカ留学で身に付けた知識と、強靭さでグローバルに活躍する事が、我々の使命なのだと感じた。

また近い将来、地球のどこかで、キラキラ輝いてる友人に再会する日まで、私も精進しようと心に誓った。

モンゴル同窓会会議出席者レポート③

アメリカの外交政策について学ぶ5週間の米国研修プログラム (SUSI) 2010 頼 はるかさん (東京大学4年)

昨年10月初旬、モンゴルでのアラムナイ地域会議に参加する機会に恵まれました。3日間という短い期間でしたが、アジア各国からアラムナイが集まり、それぞれの国内における活動の紹介や、いかにより良いアラムナイ組織を形成できるか、より良い活動を行えるかについての話し合いをしました。



アジア各国の同窓生らとともに(筆者右から3人目)

またモンゴルの伝統的なゲルにも泊まることができ、貴重な異文化体験ができました。このような充実したコンテンツと貴重な体験ができるように、一生懸命会議の準備をしてくださったモンゴルのアラムナイ組織に心から感謝しています。

グループ・コンペティションで勝利

様々なコンテンツの中でも、特に思い出深かったのは、グループで、あるテーマのもと、アラムナイ活動を計画するというアクティビティでした。最終日にプレゼンして、勝利チームには活動プランを実行に移すための資金がもらえました。



真剣に議論に参加(筆者左から2人目)

私のチームは「ユースリーダーシップ」をテーマに、若いアラムナイを中心にメンバーが集まりました。

みんなとてもエネルギッシュで、話し合いも弾みました。各国の抱える問題はそれぞれ違うという認識から、私たちは「若者がそれぞれ問題意識をもって、自国の抱える問題の解決のために行動を起こす」ということを軸に、活動プランを作りました。

具体的には、ある共通する一日に、メンバー国が一斉に自国の抱える問題を解決するための若者による若者向けのイベントを開催するというものでした。

日本の高校生に、世界へ目を向けてほしい!

日本では、近年盛んに言われるようになった「若者の内向き化」を問題意識として、特に海外などに触れる機会が少ない高校生をターゲットに、

1. 国際的に活躍する日本人による基調講演、
2. 留日外国人学生との英語ディスカッション、
3. 若手社会人との交流

という三部構成のイベントを素案として、企画中です。

幸運にも、勝利チームに選んでいただきましたので、今夏の開催を目指して、現在大学4年生を中心に準備



チンギスハーン広場にて
韓国の同窓生と(筆者左)



カンボジア、モンゴル、ベトナムの同窓生と(筆者右から2人目)

を進めています。

ぜひ、日本のアラムナイの皆様にもこの企画を温かく見守っていただきたいと思っています。

■ フルブライターによる 東日本大震災支援活動が継続中！

～風に負けない松明をつくること～

専門家らと共に、震災検証のシンポを開催

東日本大震災から半年が経った2011年10月、コロンビア大学で、[専門家ら](#)が放射能、災害対策、政治、経済、メンタルヘルスという5つの分野から今回の震災を多角的に検証するシンポジウムを行い、その企画・運営に携わることができた。コロンビア大学学長の他、在NY総領事の廣木大使も招き、会場は立ち見が出る程の盛況だった。メディアも多く駆け付け、その様子は[USTREAM](#)にて世界に向けてライブ配信された。



シンポジウム
執行部の一人
として最後に挨拶
を行う筆者
(右から2人目)

アカデミックな環境に生きる自分たちにしかできないこと

主催は[Consortium for Japan Relief \(CJR\)](#)といい、震災直後にコロンビアの様々なスクールの教授や学生によって結成された組織だ。

結成当初は、被害状況の把握や情報交換、そしてメンバー達がそれぞれ行っている復興支援活動の状況報告の場であったが、それらの活動が落ち着きを見せ始めた6月、アカデミックな環境に生きる自分たちにしかできないことをやろうと言って動き始めたのがこのシンポジウムだった。

様々な道のプロが無料でスキルを奉仕

CJRは、日本のために何かしたいという想いを持った人々が集まり有機的に発展してきた組織なので、予算もなく、全てが手作りのプロジェクトだった。

企画・運営に携わった30名程の学生や教授らはもちろんのこと、ウェブサイトのプログラマー、様々なデザインを作成してくれたグラフィックデザイナー、フォトグラファー、ビデオグラファー、メディアコーディネーターやゲストスピーカーとして招かれた5人の教授まで、様々な道のプロが無料でスキルを奉仕してくれた。

それぞれの分野で目覚ましい活躍をしている人々が、何の見返りも求めずに力を合わせる姿には、非常に心打たれるものがあった。

継続的ダイアログを目指して

今回のシンポジウムの最大の意義は、日本に対する世界の意識が消えつつあるこの時期に皆で集まって日本のことを真摯に考える、という非常にシンプルなことだったのかもしれない。



Consortium for
Japan
Relief



海外に住む多くの日本人は、日本のために何かしたい、でも何もできないという、郷愁の念と無力感の狭間で苦しんでいる。

このシンポジウムはそんな人々が参加できるスペースを創り、タスクを与えた。徐々にボランティアが増え、まだ活動が続いている他の復興支援団体からもそれぞれの形で参加し、新たなエネルギーが加わった。

盛大な打ち上げ花火じゃなくていい。今後必要なのは、まだ残っている火を一つにしていくことによって風に負けない松明をつくることだと感じた。



震災1年を機に新たなシンポを企画

2012年4月4日、東日本大震災の一周年を機に、メンタルヘルスにフォーカスを置いた新たなシンポジウムを企画している。一時的で一方通行の投げかけではなく、継続的なダイアログとして、今度は実際に東北で被災者と向き合っておられる医療関係者を招き、被災地の生の声を聴く予定だ。同時に、日本、チリ、タイ、インドネシア、ハイチなどの近年大規模な自然災害に見舞われた国出身のコロンビア大生を一堂に集めて、United Students for Disaster Reliefというイベントも行う。災害支援に携わる中、蓄積したそれぞれの経験と知識をアーカイブし、次の災害が起こった際にすぐにでも使える災害支援ウィキの作成を目指す。世界有数の災害大国として、日本が先頭となってこのようなプロジェクトを行う責任感のようなものを感じている。

海外に学んだからこそ

僕は2008年からフルブライト奨学生として留学させて頂いている。教育学の博士課程に在籍しており、卒業後は日本で教育に携わるつもりだ。どのような形になるのかはまだわからない。ただ、海外に学んだからこそわかる日本の素晴らしさ、そして日本に対する危機感がある。いかなる形にせよ、世界との継続的な対話を通して日本の教育を改善していきたいということだけは心に決めている。



プロフィール

鈴木 大裕

2008年度フルブライト
大学院留学プログラム
コロンビア大学
博士課程在籍 (教育学)

Alumni Media Coverage

福田衣里子さん

衆議院議員
IVLP 2012

■現在、福田議員により連載中のSPUR・2月号と3月号に、IVLPの参加報告記が掲載されました。福田議員は2011年秋、医療・福祉分野のプログラムに参加。ご自身のブログでもIVLPの報告を、写真とともに紹介されています。

<http://goo.gl/mbHDDH> <http://goo.gl/gnVtM>

和田 照子さん

経団連職員
フルブライター
2002

■ガールスカウト世界連盟の理事に選任。2011年9月16日の朝日新聞「ひと」欄で紹介されました。→後段10頁の和田さんの寄稿もご覧ください。

Alumni Publication

上野真由美さん

IOM職員
フルブライター
2007

■国際移住機関(IOM)ソマリア事務所の人身取引対策官である上野真由美さんが記者の一人として携わった「リーダーシップ 6つの試練」(ハーバード大学教授 ディーン・ウィリアムズ著)の翻訳版(英治出版、2011年9月刊)が出版されました。

寺澤 芳男さん

元 米国野村証券
会長
フルブライター
1956

■参議院議員、経済企画庁長官、ローンスター・ファンド日本法人会長を歴任された寺澤芳男さんが2011年11月、日本経済新聞「私の履歴書」を執筆されました。

Alumni Award

秋葉 忠利さん

AFS日本協会理事長
フルブライター
1968

■2011年10月に、核時代平和財団(Nuclear Age Peace Foundation)より「傑出した平和指導者賞(Distinguished Peace Leadership Award)」を受賞。また、2011年5月には、ネパール政府の創設した「ゴータマ・ブッダ国際平和賞」を受賞されました。

甲斐 久実代さん

カリフォルニア大学
アーバイン校
フルブライター2010

■2011年10月に、ワシントンD.C.で行われたダンス医科学の国際学会でEducation Based Awardを受賞。→後段11頁の甲斐さんの寄稿もご覧ください。

■ Eisenhower Dayを祝う、日本アイゼンハワー・フェローの集い

2011年11月30日、日本記者クラブ会議室においてアイゼンハワー・デーを祝して、アイゼンハワー・フェロー同窓会により会合が開催されました。会合では、同年9月24日～11月13日まで、フィラデルフィアで行われた「[2011Northeast Asia Regional Program](#)」の成果が、参加者4名から報告されました。また、昨年10月にインドネシアで開催された「[Asia Regional Conference](#)」への参加報告も合わせて行われました。



■ 退任の挨拶: フィリップ・P・ホフマン 広報・文化交流担当公使

2011年12月をもって、広報・文化交流担当公使を退任することとなりました。27年半に渡る外交官生活の最後を、この日本で終えられることを、大変嬉しく思っております。2011年は、東日本大震災という大きな災害に見舞われた大変な年でした。それに関わらず、日本の皆様が見せた立ち上がる力は、アメリカのみならず、世界中の人々に感銘を与えました。昨年7月に行った「トモダチ作戦に関する講演会」では、多くのアラムナイの方から、御礼の言葉をいただきました。震災後の協力という共通の経験を経て、日米両国がより強固な絆で結ばれたと感じています。皆様は米国政府が主催・後援するプログラムのアラムナイとして、日米関係の重要な役割を担っておられます。これからも、我々二国間の同盟関係を、皆様が更に強固なものにしていくことを願っています。心より願っております。最後になりましたが、皆様のますますのご活躍とご発展をお祈りしております。ありがとうございました。



イースト・ウェストセンター (EWC) 日米記者交換計画 (2011)

2011 Japan-United States Journalists Exchange

共同通信那覇支局で米軍基地問題の取材を担当していた一昨年秋、在沖縄米総領事館の知人が「日米記者交換計画」の存在を教えてくれた。毎年、双方から5人前後の記者を派遣しており、今回のテーマは「日米同盟のさらなる発展」。

首都ワシントンやテキサス、カリフォルニア両州、米太平洋軍の拠点があるハワイを訪ね、政府機関やシンクタンク、時には一般家庭で夕食を取りながら日米関係について意見交換するという企画で、アジアにおける中国の存在感が高まる中、米国は日本をどう見ているのか、ぜひ聞いてみたいと思い参加させていただいた。

日米記者交換計画とは？

日米記者交換計画は日本新聞協会と米研究機関の東西センターの共催。1973年が第1回というから歴史は長い。繊維輸出をめぐる日米摩擦を受けて、両国の記者や編集者が相手国の実情に触れる機会を提供、相互理解を促進することを目的に始まったとされる。

日本人記者5名とともに、訪米

昨年3月上旬。まだ肌寒いワシントンで、朝日、毎日、産経、東京、熊本日日の各新聞社の先輩記者とともに、対日政策を担当するドノバン国務副次官補(当時)、知日派で知られるシンクタンク「外交問題評議会」のシーラ・スミス上級研究員、米通商代表部(USTR)当局者らと米軍普天間飛行場移設や環太平洋連携協定(TPP)の問題、日本の民主党政権への評価などについて率直な議論を交わした。世論調査機関ピュー・リサーチセンターでは、米国人の41%が最大の経済大国は中国だと答え、日本と答えた人は8%に止まるとの一昨年の調査結果を聞いた。

米国で、3.11を知る

慌ただしくも実り多い日程をこなしていた私たちが東日本大震災の発生を知ったのは2番目の訪問地、テキサス

州オースティン滞在中だった。津波が次々と住宅を飲み込む映像をあらゆるテレビ局が速報していた。

やがて福島第1原発の爆発も報じられた。東北地方の出身で身内と連絡が取れない記者もいて、母国の惨状に一同、茫然自失の状態だったが、米国にいるからこそ取材できることがあるはずだと気を取り直し、全員が取材の継続を決めた。

その後の訪問先では例外なく取材相手からお見舞いの言葉をいただき、道端でも日本人だと分かれると「家族は大丈夫か」と声を掛けてくれる米国人らがいた。



サクラメント・ビー紙編集幹部にインタビューする筆者(左)＝2011年3月、米カリフォルニア州 サクラメント(東西センター提供)

サクラメント 訪問1.ー 州エネルギー委員会

その後、カリフォルニア州サクラメントに移動。州エネルギー委員会を訪ね、事務局幹部に日本の原発事故が州内にある2カ所の原発のライセンス(運転許可)更新に与える影響について尋ねた。「日本の状況が、地質学的にわれわれの原発にも大いに当てはまると判断された場合、許可が更新されない可能性もあるだろう」。日本と同様に地震が多発する同州。地元紙は巨大な津波が原発に襲いかかる風刺画を載せ、社説で「想定を超えた地震や津波などにいかに備えるかを、一から議論すべきだ」と主張していた。こうした状況を記事にして現地から配信した。

→次ページに続く



プロフィール

岡坂 健太郎

イースト・ウェストセンター

日米記者交換計画 2011年

共同通信社 編集局科学部 記者

2001年入社。社会部、新潟・鹿児島・那覇支局を経て、2011年6月から科学部に在籍。

イースト・ウェストセンター (EWC) 日米記者交換計画 (2011) 2011 Japan-United States Journalists Exchange

サクラメント 訪問2-電力供給公社

次に訪れた「サクラメント電力供給公社(SMUD)」の取り組みは、震災後のエネルギー政策のあり方を考える上で示唆に富んでいた。1989年の住民投票で原発閉鎖派が多数を占め、「脱原発」を実現したことで知られる。その後、白熱灯を蛍光灯に、古い冷蔵庫を省エネ型の新式に取り換えるとか、日陰を作るために顧客の家の前に広葉樹を無償で植えたり、屋根に太陽光発電設備を設置するなど、省エネと再生エネルギーの推進を進めてきたという。一方で、閉鎖した原発の廃炉作業が最近まで続いたと聞き、まだ緒にも就かない福島第1原発の廃炉作業の行く末を案じた。

太平洋津波警報センター所長と会見

最後の訪問地ハワイでは、主催者をお願いして太平洋津波警報センターのチャールズ・マククリーリー所長への取材をアレンジしていただいた。

「(海に面した)沿岸国にとって、千年に一度しか起こらないような大災害にどう備えるかは大きな問題だ」地震は多発する時期と安定期があり、今が多発時期に当たる」。

こうした警鐘も帰国後にインタビュー記事として紹介させてもらった。震災後も国内外で大きな地震は続いており、防災や減災が喫緊の課題であることを示唆する、貴重な指摘だった。

「トモダチ作戦」に感謝

残念だったのは最も重視していた、米太平洋軍司令部への取材が直前にキャンセルになったことだ。軍事戦略上の観点から沖縄をどう見ているのか。普天間飛行場の県外移設の選択肢は本当にないのか、当事者にぶつきたいと思っていたからだ。だがその理由が、被災地を支援する「トモダチ作戦」で関係者が忙殺されているためだと聞き、落胆は感謝に変わった。

様々な形の米国メディアに触れて

このほか、米国の伝統ある新聞社と寄付で成り立つ新興ネットメディアの両社を訪れ、取材が出来たことはメディアに身を置く者として興味深かったし、米国で活躍するトヨタや工作機械メーカーといった日系企業幹部へのインタビューも刺激的だった。ハワイで合流した

米側記者団と交流したことも思い出深い(彼らは震災発生時、沖縄で米軍当局を取材中だったそうだ)。

9年ぶりに沖縄から東京本社へ

帰国後、9年ぶりに東京本社に戻り、科学部記者として原発事故関係の取材に携わっている。米国で得た知識や経験は大きな糧となっている。

福島第1原発を初めとした日本の原発の安全性については世界的にも関心が高いことを肝に銘じてこれからも取材を続ける所存だ。

震災の混乱にもかかわらず、円滑に記者団を引率してくださった日本新聞協会と東西センターに改めて御礼申し上げたい。



一般市民のお宅で歓談後、記念写真に収まる筆者(中心部の茶色のジャケット)⇒2011年3月、米カリフォルニア州サクラメント

■イースト・ウェストセンター(EWC)
日米記者交換計画に、ご関心のある方は、下記をご覧ください。
<http://goo.gl/HD6uR>



■同プログラム参加者の写真は、
東西センターウェブページにある下記リンクより
ご覧いただけます。

Vimeo Video <http://vimeo.com/21995643>

日米青年政治指導者交流プログラム(JCIE主催) U.S.-Japan Young Political Leaders Exchange Program (JCIE-ACYPL)

2011年7月16日～30日、米国を訪問

この度、JCIEと米国青年政治指導者会議(ACYPL)との共催による訪米プログラムに参加する機会をいただきました。公明党本部職員として、国の政策や議員活動と地方政治をつなぐ業務、そして青年政策及びその党活動を展開する業務を担っている私としては、大変貴重な経験となった。

プログラムでは、ワシントンD.C.で主に国務省、政党関係者などと連邦政府の概要や米国内の政治情勢について意見交換を行い、ミネソタ州では連邦政府と州・郡・市の政治の仕組みの違いを学び、コロラド州では州裁判所での傍聴という貴重な経験や、航空士官学校で意見交換、交流をすることができた。



コロラド州米国防空士官学校にて (筆者左)

日常的に行われる米国の選挙運動

しかし何よりも勉強になったのは、米国における選挙運動の考え方だった。大統領選挙について共和党、民主党双方の選挙関係者から話を伺うことができ、コロラド州でエル・パソ郡選挙管理委員会などと懇談して地方選挙について意見交換もできたが、上院・下院議員(連邦政府と州政府)、郡・市議会議員、そのほか司法長官なども選挙で選ばれている米国では、日本と違い、選挙運動が日常的に行われている。

そうした選挙で、最も重要な活動が「資金集め」とのことだった。この選挙資金集めと、戸別訪問が選挙運動の基本となっている印象を受けた。

訪米前、戸別訪問は選挙運動の基本であり、資金集めは有権者からの「投資」であると私は考えていた。そのことを裏付ける選挙運動の話聞き、候補者と有権者双方の選挙運動に対する意識の成熟さを感じた。日本の場合、戸別訪問は公選法で禁止されている。お金を集めることも有権者にとって良い印象に映らない。これらが米国では当然のこととして堂々で行われているのだ。

さらに、米国における選挙運動の特徴が「ネガティブキャンペーン」である。他候補のマイナスイメージを強調するネガティブキャンペーンは、日本では慎重意見が多い。米国では効果があれば当然行うという見解だった。

有権者の健全な選挙意識

主権が国民、市民にあるならば、候補者がどのようなアプローチを行おうとも、その判断はあくまでも有権者であることが明確になっていると実感させられた。そのような意味でも、選挙資金集め、戸別訪問、ネガティブキャンペーン、これらを積極的に行う米国の選挙運動は、有権者の健全な選挙意識に裏づけられたものと考えられる。



ミネソタ日米協会の皆さんと (筆者左端)

翻って日本は・・・

一方、日本の公選法に思いを巡らすとき、その性格は「性悪説」的な立場に立つものと考えざるを得なかった。有権者の選挙意識を高めるためにも、柔軟な選挙運動が可能となるような公選法の改正が必要と感じた。

今回の訪米で、共に参加したメンバーと党派を超えた友情を築くことができた。このメンバーとの交流を続けながら、今後も日米関係をさらに強固なものにするため、訪米で実感した“日本との違い”を、国会・地方議員を支える政党職員として幅広く生かしていきたい。

最後に米国大使館をはじめ、JCIE、ACYPLの皆様、お世話になった方々に心から感謝を申し上げたい。日米関係の発展に貢献することで恩返ししていきたいと思っている。



プロフィール

雨宮 秀樹

2011年 日米青年政治指導者交流プログラム(第23回)

公明党本部総合センター

組織活動局主任;党青年局次長

フルブライト大学院留学プログラム Fulbright Graduate Study Grant Program

フルブライト×経団連×ガールスカウト

留学、NY bar合格、そして仕事復帰

私は2002年7月から、フルブライト大学院留学プログラムの奨学金を頂き、米国ワシントンD.C.にあるジョージタウン大学のロースクールへの留学の機会を得た。

経団連事務局で経済法制の立法提言活動に関わっていた経験等を踏まえ、主に反トラスト法(競争法)、税法などを学んだ。また、比較租税法のゼミの担当講師に誘われ、翌年にはIMF法務局で途上国における租税法の立法支援業務にインターンとして携わる機会を得た。経団連職員として日本での立法政策に携わる私にとって得難い経験となった。2003年にニューヨーク州司法試験に合格し、翌2004年に弁護士資格を取得した後、経団連事務局に復職した。

ガールスカウト世界連盟の理事に選任

帰国後、経団連で働いた経験や米国留学で学んだことをガールスカウト日本連盟で理事として活かしてほしいと、ガールスカウトの先輩からの誘いを受けた。私は中学1年からガールスカウトとしての活動を続けており、就職してからも、長期休暇にガールスカウトのキャンプの手伝いや、海外ガールスカウト来訪時の通訳などをしてきたが、日本連盟の役員など想像したこともなかった。



スタッフとして参加した、2011年8月にガールスカウト日本連盟が主催した被災地の子供招待キャンプの様子(ガールスカウトの活動紹介の一環)

もちろん最初は戸惑い、一度はお断りしたものの、ガールスカウトとして奉仕の精神で働くべきだと説得され、経団連職員としてフルタイムで働く傍ら、2005年5月からガールスカウト日本連盟の理事になった。2007年からは副会長、2009年からは会長として日本連盟の運営にあたった。そして2011年7月、ガールガイド・ガールスカウト世界連盟の理事に選任された。



MDGsなどに貢献するガールスカウト運動

ガールスカウトは、世界中145の国と地域で1000万人の会員を抱える世界最大の少女と女性のための団体である。少女と若い女性を「自ら考え行動できる責任ある市民に育てる」ことを使命とし、国連ミレニアム開発目標をはじめとするグローバルアジェンダに、少女たちが主体的にかかわるプログラムを提供している。ガールスカウトとして育ってきた人間として、今、この運動の発展のために積極的に関わる機会を与えられたことをとても光栄に思う。



世界連盟理事の集合写真(筆者、前列右から2人目)

フルブライト奨学金に感謝

今改めて振り返ると、留学をきっかけに、それまで経団連の一職員として働く毎日を送っていた私の生活は一変した。

フルブライトの面接で、留学後はガールスカウトとしても社会に貢献したい、と話した記憶がある。図らずも、フルブライトでの留学がそのきっかけとなって、今の私がいる。もちろん、勤務先である経団連の上司や同僚の理解、家族・友人の支援なしに、巨大な国際的団体の役員としての責任を全うすることはできない。生活は多忙ではあるが、同時に多くの興味深い尊敬すべき人々との出会いを通じて、学び、成長する機会に恵まれている。

日米教育委員会をはじめ、このようなチャンスを与えてくれた全ての組織・人々に改めて感謝するとともに、将来の奨学生が同様に多くのチャンスをつかみ、それぞれの可能性を最大限に広げることを願ってやまない。

プロフィール

和田 照子
2002年度 フルブライト大学院留学プログラム
ジョージタウン大学ロースクール
(社)日本経済団体連合会 経済基盤本部主幹
ガールガイド・ガールスカウト世界連盟 理事

フルブライト大学院留学プログラム Fulbright Graduate Study Grant Program

ダンス医科学ってなに？

私は現在フルブライト奨学金を受け、カリフォルニア州のUniversity of California, Irvineの修士課程ダンス学科でDance Medicine and Science(ダンス医科学)を勉強しています。ダンス医科学と聞いて「はてな？」と思われる方がほとんどだと思います。

ダンサーはアーティストであり、アスリートでもあります。ダンサーの怪我の発生率は50%以上という報告もあるにも関わらず、スポーツに比べてリハビリの方法などがまだ研究されていません。

私はバイオメカニクス、特に動作解析を用いて、ダンサーの動きの解析、安全なトレーニングに向けて研究しています。



ダンスクリニックを見学

国際学会でEducation Based Awardを受賞

2011年10月にワシントンD.C.で行われたダンス医科学の国際学会IADMS (International Association for Dance Medicine and Science)でポスター発表を行い、Education Based Awardをいただくことが出来ました。

3年前に学会に初めて参加した時から、私の「アメリカでダンスサイエンスを勉強して、日本でダンス医科学を広めたい」という夢をずっと応援してくれるアメリカ人の学会の友人も受賞をとて喜んでくれました。

学会発表の際はバレリーナの友人が写真のモデルを、ダンス教育専門の友人がダンス用語をチェックしてくれました。私のクラスメートは9人で、ダンス医科学をやっているのは私だけという点でとてもチャレンジングです。

しかし、ダンサーと一緒に過ごし、一緒に考えるこの環境は「現場と研究を結びたい、そうすることでもっといい環境が出来るはずだ」と考えている私には本当に学びが多いです。



学会のポスター発表にて

各国のフルブライターから刺激を受ける

昨年のフルブライトの夏の研修にて、オハイオ州立大学で農業を学ぶインドネシア人フルブライター、オレゴン大学で養護教育を学ぶベトナム人フルブライターと、国際協力を学ぶカザフスタン人フルブライターと一ヶ月暮らす機会がありました。

お互いの国のこと、将来の夢、自分の国、世界がこれからどうなっていくって欲しいかなど、夜な夜な語りました。

今年の夏、私がニューヨークにダンスクリニックを見学に行った際に、カザフスタンのフルブライターが国連でインターンをしていて再会し、とても刺激を受けた一週間となりました。



学校のフルブライターとともに(筆者、右から3人目)

ダンス医科学を通じ、日米両国に貢献したい

私がフルブライト奨学生として学んだ事、それは「自分の国と分野に貢献したいという熱い気持ちをもっていれば世界をもっと良くする事が出来る」ということ。

多くのフルブライターに会う度に、国や分野を超えてその熱い気持ちを持った仲間がいる、と思える事は私にとって大きな力です。

卒業後は博士課程に進学し、バイオメカニクスをさらに学びたいと考えています。

将来はダンス医科学を通して、日米の理解と相互発展に貢献して行きたいと考えています。

プロフィール

甲斐 久実代

2010年度 フルブライト

大学院留学プログラム

カリフォルニア大学アーバイン校

修士課程ダンス学科 在籍



■Facebook に日本IVLPグループがOpen !

IVLP限定のFacebookグループ「日本IVLP」を立ち上げました。
皆様のお力をお借りしながら、「日本IVLP」グループを、有益なコミュニケーションの場に発展させたいと考えております。ご参加、お待ちしております！

75名のIVLP Alumni
に登録していただ
いています！

【 Facebookグループ「日本IVLP」の詳細 】

参加方法

2通りあります。ご都合の良い方をお選びください。

- ①Facebook上で、「US Embassy AlumniCoordinator」というアカウントを検索→友達リクエストを「US Embassy AlumniCoordinator」へ送ってください。→その後、当方が承認し、「日本IVLP」グループへ追加させていただきます。
- ②Facebookのアカウントに使用されているご自身のメールアドレスを、ShimoteMX@state.gov までお送りください。Alumni Coordinatorが、Facebook上で皆様のメールアドレスを検索し、友達リクエストをお送りします。その後、皆様から承認をいただいたら、「日本IVLP」グループへ追加させていただきます。



グループの管理人(2名)

米国大使館 広報・文化交流部 IVLP担当者: 廣江 未希 および Alumni Coordinator: 下手 円

立ち上げの理由と目的

IVLPは、プログラムが参加者個人個人に対しカスタマイズされているため、数名ないはお一人でプログラムに参加される場合が多く、参加者同士、ご交流いただく機会が少ないのが現状です。



これを改善したいと考え、IVLP参加者の皆様に、今後のご活動やお仕事に少しでも、お役立ていただけるような情報や参加者同士のコミュニケーションの場を提供することを目指し、Facebookグループ「日本IVLP」を立ち上げました。

グループ内でシェアする内容 (IVLPのAlumniの皆様の意見もどんどん取り入れたいと思っています！)

- ・IVLP参加者の皆様による、プログラム体験記、帰国後の近況報告等。また、皆様のお仕事に関連するイベント告知や案内。
- ・IVLP参加者の新聞、雑誌、ウェブやブログなどの記事。
- ・大使館からの様々なプログラム、情報の案内。

グループの定義(「日本IVLP」グループのプライバシーは非公開に設定しています。)

グループは、Closedです。

誰でもグループとそのメンバーを見ることができますが、グループの投稿はメンバーだけに表示されます。

■アメリカのシンクタンク、東西センターのフェロシップ募集のご案内

ハワイおよびワシントンD.C.にある米国のシンクタンク・東西センター(East West Center)が下記のフェロシップの募集を開始しましたので、ご案内申し上げます。詳細は、以下をご覧ください。



- Asia Studies Fellowship in Washington, D.C. 募集 <http://goo.gl/U6cNY> 締切: 2012年3月5日
- Japan Studies Fellowship in Washington, D.C 募集 <http://goo.gl/PnYvv> 締切: 2012年3月15日
- アジア・パシフィック・リーダーシッププログラム(APLP) 2012-2013 募集 <http://goo.gl/DzC15> 締切: 2012年4月



■ 国務省運営のアラムナイ限定サイト ■

登録はこちらから → <https://alumni.state.gov/landing-page>
 お忙しい方には、アラムナイ・コーディネーターが代わりに登録を行い
 仮パスワードを発行します！



米国政府主催の交流プログラム参加者限定サイトの紹介。アラムナイ同士の交流が図れるだけでなく、イベント情報、求人情報、ニュース、補助金・奨学金などの情報が満載。同窓生の写真や論文等も掲載されています。

未登録の方はぜひ、この機会に以下のアドレスからご登録ください。

<https://alumni.state.gov/landing-page>

ご不明な点などがありましたら、下記のエメールアドレスまで、遠慮なくご連絡ください。

アラムナイ・コーディネーター 下手 円
ShimoteMX@state.gov



■ 連絡情報更新のお願い

お勤め先、ご住所、メールアドレス等々の更新をお知らせください。

(下記フォーマット参照)

- 最新のアラムナイ向けニュースやイベント情報を随時お送りします。
- 今後のニュースレターに、是非、経験談をご投稿ください。
- 米国国務省教育文化局公認の月間優秀アラムナイへの自薦・他薦を受け付けております。

米国大使館
 広報・文化交流部
 教育人物交流室
 Education and Exchanges Office
 Public Affairs Section
 EMBASSY OF THE UNITED STATES
 JAPAN

Phone: 03-3224-5246
 Fax: 03-3588-0749
ShimoteMX@state.gov

ご記入の上、最新の連絡先をメール又はファックスにてご返信ください

お名前:
所属:
役職名:
Eメール:
電話 / FAX :
ご住所 : 〒